



# 京都大学 総合人間学部 広報

## 特集 総人探検隊

今回の『総合人間学部広報』では「総人探検隊」という特集を企画しました。総合人間学部は私たちにあって、とても複雑で得体の知れないところです。そこで、総合人間学部生の有志のみなさんを募って探検隊をつくり、興味のある研究室を訪問して、どのような研究が行われているのかを探ってみることにしました。

今までも、総合人間学部での研究・教育活動を紹介する記事はたくさんありましたが、いずれも教員の側から自分の研究を紹介するものでした。これに対して本企画では、学生のみなさんの視点から見たものが描かれています。いずれも力作ぞろいです。どうぞお楽しみ下さい。

なお、執筆者欄に掲載されている学生のみなさんの学年は探検を行った2005年度のものであります。

研究室訪問記 .....	道坂班 .....	2
「環境」とはなんだろうか — 総人の研究室を訪ねて — .....	勝又班 .....	6
主観をたいせつに .....	阪上班 .....	9
山梨正明教授（認知言語学）をインタビュー .....	櫻川班 .....	14
物理学系の研究室を訪ねて .....	山田班 .....	18

## 特集 総人探検隊

### 研究室訪問記

#### 道坂班報告

西尾 直人（1回生）

川又 健志（自然科学系2回生）

溝口 佑爾（認知情報学系2回生）

道坂 昭廣（国際文明学系助教授）

私たちが一番熱心に話し合ったのは、ひょっとすると、どの先生に取材させていただくかであったかもしれない。結局、各人の抱えている興味に従い、先生方が進めておられる研究を中心におはなしをうかがうことになった。お忙しいなか、先生方には長い時間をとっていただき、初歩的な質問、またまどまりなく脱線の多い取材に快く応じて下さった。私たちにとっては大変有意義な時間をもつことができ、先生方にはただひたすら感謝するしかない。

私たちは、取材においては「学生からの視線」を忘れないようにしようということだけを共通の約束とした。学生の方々に、各先生の御研究やお人柄が伝われば幸いである。ただ、私たちは学生の視線は忘れなかったけれども、取材のなかで「学生としての立場」を、忘れてしまう瞬間も多々あった。お時間を割いていただきながら、先生との会話の面白さ楽しさのほんの一部分しか表現できなかったこととともに、心からのお詫びを申し上げたい。

#### 西井正弘先生（国際文明学系）



西井正弘先生は、国際法、国際人権法、国際環境法を専門にされています。先生は、高校生当時の外交官へのあこがれから法学部へ進学するも、学部時代に法律

の面白さに惹かれ、入学当初からの方向性を変えて研究者になる道を選択されたらしいです。

1回生のころはそれほど勉強をしていたわけでもなく、2回生になってまあぼちぼち始めたくらい、勉強に本腰を入れたのは3回生になってからだったそうです。なので1、2回生の間に自分の

将来についてじっくりと考えることは、必ずしも遠回りにはならないのではないかと思います。

僕が聞かせていただいた中で、以下のような話が印象に残っています。

○ベビーブーム世代に生まれた現職の教授がもうじき何人も退官されることになるので、これからの5~10年間は教授のポストに比較的空きが生まれるらしく、研究者という職業が今までよりも門戸が開かれたものになりそうであるということ。

○総人の主専攻・副専攻は、アメリカの大学でいうところのメジャー・マイナーに相当し、留学などの際にはそれと同等の扱いを受けること。

○僕は将来国際機関で働くことも考えているのですが、国際機関で求められる専門性というのは、自分が働きたい機関の活動と必ずしも直結してい

る必要はなく、むしろその機関の空きポストで求められる人材と自分の専門性とのマッチングが成功するかどうか、ということの方が重要であること。

先生のホームページにも掲載されているのですが、先生の研究室からの学部生の主な就職先は、読売新聞・産経新聞などマスコミ、国家公務員(財務省／警察庁／総務省／厚生労働省)やメーカーなど、多方面にわたっているようです。

あと個人的に印象に残っている点は、とても誠実な対応をしていただいていた大変うれしかったことです。こんな風に人と接することができるようになるといいなあと心から思いました。

この記事を読んでいただいている方達にも、何か参考になるところがあれば幸いです。

## 新宮一成先生 (人間科学系)

「すべての病気に論理があると考えます」

その言葉を聞いたとき、新しい歯車が回り始めたような気がした。世界を動かす巨大な機械のようなものがあつたとして、それを構成する大きな歯車のなかでいままで止まっていたものが回転を始めた、そんな気がした。それは精神分析的なものを見かたを身につけるには何が必要かという問いへの返答だった。

当然だけど、人はいろんなものに蓋をしている。本来わけのわからないものは多いのに、「わけのわからなさ」にはけ口みたいなものを用意してそこに蓋をすることで、そのはけ口以外のものに意味を与える。ここではそのはけ口をカオス、はけ口以外のものをコスモスと呼んでみたいと思う。つまり、人はカオスという逃げ道をつくることでコスモスを確保する。異論はあるかもしれないけれど、封印されて意味を剥ぎ取られた存在をつく

ることで、意味そして論理を伴った存在を確保する。さしあたってそう考えてみる。

例えば幽霊。幽霊ってものを作ることで、どうなっているか説明のつかないものをみんな幽霊のせいにする。神というのも、ほとんどの場合、ここで言うカオスだろう。カオスを作る、そしてカオスを受け入れるのは昔の人や迷信じみた人に限られるわけじゃない。今の人たちにとって大きな存在感を持つけど無内容なもの、例えば「愛」とか「友情」とか、ほとんどの人にとっての「科学」とかもゴーストでありカオスであるだろうし(極端に言えば「平和」とかもそうだろう)、「病気」もまたそのような側面を持つだろう。

先の言葉を聞いた後、虚数のことを考えた。虚数はカオスとして生み出された。「現実には存在しない」数というカオスを生み出すことは「現実の」数をコスモス化した。しかしそのカオスは単なる逃げ口に留まらず、回転を伴う独自の計算方法(論理)を獲得した。はじめはナンセンスに思えた虚数の計算だったが、やがては「現実の」数を飲みこんでしまう。最終的に、回転を描く虚数の論理は数学という営みの全体を透明でなおかつ色彩感を持って丸く治め、補完することになった。

虚数の計算がナンセンスと思われていた時代、その計算はカオスに論理を与える営みだった。それはカオスに封印するのとは逆のベクトルを与える営みだった。そして今の僕たちが病気に対してそれ独自の論理を考えることもそんな営みだ。

確かに恣意的な行為かもしれないけれど、それはゴーストを説明するためのゴーストを作る、つまりゴーストを二重化するのとはちょっと違うように思える。虚数というカオスに独自の論理を探るという行為は目の前にあるものを対象化して観察するというよりは「自分を取り巻く世界」の外側を探る行為だ。外から中を見るときよりは中から外界を探る、そんな行為だ。「だから正当だ」

ということは当然ないけれど) 病気に論理を与えることは世界を動かす歯車を回転させる行為に思えた。虚数に計算を与えることが世界に今までになかった軸を設定し、回転という動作を与えたのと同じように。

### 吉田 純先生 (人間科学系)

吉田純先生は社会学に分類される研究、特にユルゲン・ハーバーマスの公共性を研究されている先生だ。

教育学部を卒業後、京大文学研究科へ進む。しかしこの間2年ほど浪人している。「浪人」と本人はおっしゃっていた。実際はこの時期、聴講生として文学部に在籍していたのだけれど。

学部時代はマスコミ志望だったそうだ。社会の問題との直接のつながりを持ちたかったのだろうと語る。しかし最終的には、社会と間接的にかかわる道である社会学の専攻を選んだ。きっかけは学生時代に会ったパソコン通信だった。そこで体験した異質な世界の人とコミュニケーションすることの面白さが趣味から研究への変化を促した。

そこでは自分に見える風景と本の上の理論とのつながりが生まれる瞬間があった。例えばパソコン通信で見たコミュニティが、アンソニー・ギデنزの言うようなモダニティ (近代性) の徹底化の帰結としての「情報社会」という理論的な視点と重なる瞬間があった。社会学者が体験するものの一つがそのような瞬間なのだろう。その瞬間、自分が直面している世界が物語の中に取り込まれる。今から自分が生み出そうとしていることすら、歴史的な文脈に包み込まれる。

吉田先生のもとで、フリーターについての卒論を書いた学生がいた。どうしてフリーターをやっているのか?と聞いてみると「やりたいことを探



すため」と答える人が多いのだそうだ。この答えは納得できるように思えるかもしれない。しかし本当にそうなのだろうか?このことは動機の語彙という社会学の概念を思わせる。動機の語彙というのは動機を説明する言葉で、一見行為へ至った動機のように見えるけれども実際には逆にその行為によって生み出される言葉のことだ。つまり「やりたいことを探すため」という語彙はフリーターになってから生み出されたということだ。フリーターが「本当」にやりたいことを探すためだと「思って」いたとしても、その「実感」自体も動機の語彙という視点の中に組み込まれてしまう。このような一連の考察も、世界全体の物語化と言えるのではないだろうか。

吉田先生は戦記ものを読むのが趣味なのだそうだ。「今」が歴史的な文脈の中に包まれる風景を仕事でみる人の趣味の時間は歴史的物語に「今」が息づくのを感じる時間なのかな。ふとそんなことを思った。

なお、パソコン通信の話は、吉田 純「思想的アリーナとしての情報社会論」越智貢ほか編『岩波応用倫理学講義3：情報』2005年、岩波書店、65～84頁. に詳しく載っている。

### 渡部 幹先生 (人間科学系)

渡部先生は、いわば「総合人間学部的」な人で

ある。といっても出身は北海道大学で、決して総人を卒業した、というわけではない。それはつまり、彼が私たち総合人間学部の学生、少なくとも一部の学生と同じような考えの下で大学生活をおくっていたという意味においてである。総人の一部の学生のもっている考え、その一部に私自身も含まれるのだが、それは次のようなものである。

「大学生になるにあたって、専門分野をある程度決めねばならない。しかし、興味のあることが多すぎてなかなか一本に絞ることができない。とりあえず、選択肢を多く残しておくのが得策かもしれない…」繰り返しになるが、私たち総人の学生の中にはこんな考えを持ってこの学部を選んだ人もいるであろう。少なくとも私はそうであった。

渡部先生もまたそのような考えの持ち主であったようである。とにかく選択肢を多く残しておいて、とにかく様々な分野を試してみて、それから好き・嫌いの判断をして自分の進むべき道を決めていこう。

このような態度で大学生活を送っていた渡部先生には、ある信念があったらしい。

いろんな分野に挑戦してみると、当然自然と各分野に対して好き・嫌いの感情を抱くわけだが、なぜこの分野に対しては好きという感情を抱くのか、逆になぜあの分野には嫌いという感情を抱くのか、そしてその嫌いな分野を好きになるにはどうすればいいのか、そういったことを常に自分に問いただしていったらしい。こういう態度こそが学部時代に持つべき姿勢の一つだと渡部先生は言う。

ではもう一つの持つべき姿勢とは何なのか。彼曰く、それは「学問的手法」、すなわちスキルであると。たとえば、社会学の分野で言うならば、統計データの取りかたや分析の仕方といった具体的な技術のことである。

彼は学部生時代、この二つの姿勢を持ってすご



していたらしい。

そしてもうひとつ、学部生時代の彼に大きな影響を及ぼした事がある。それは「出会い」である。

彼は、大学生が自分の進路を決める上で非常に大きな存在に、つまりすばらしい師匠に学部生時代に出会うことができたようである。今では有名な社会心理学者であるその師匠の人間性にも惹かれたらしい。師匠との出会いが、渡部先生に社会心理学者としての道を選ばせたのだ。

渡部先生はまた、多くのディスカッションを重ねることで様々な分野の人の意見・主張に出会ったようである。ディスカッションをすることで、多くの分野に対する考えを自分のなかにより鮮明に描きあげていったらしい。

自分の進むべき道をまだはっきりと決めることができない。もしそういう人がいるなら、渡部先生の生き方を参考にするといいかもしれない。多くの選択肢、可能性を秘めている総合人間学部。その可能性のあまりの大きさにかえって圧倒されてまごつきうろたえることも、もしかしたらあるかもしれない。しかし、うろたえるだけでなく、色々な分野に触れてみて、ある程度の像を作り上げていきながら、取捨選択をして自分の納得のいく道を見つけられる機会も、この学部の学生には当然与えられているのである。とにかく試行錯誤を繰り返し、自問自答をしながら進んでいくべし。

そう私自身に言い聞かせながら、これからの大学生活を改めて考えなおしてみる。

## 「環境」とはなんだろうか ― 総人の研究室を訪ねて ―

### 勝又班報告

池田 晃彦（1回生）

関崎 敬介（1回生）

佐藤 衆一（自然科学系2回生）

勝又 直也（文化環境学系助教授）

毎年、総人には120余名の学生が入学してくる。伝統のある、いわゆる〇学部でなく総人に入ってくる人たちだから、当然、問題意識は高い（と感じる）人が多い。その中には環境問題をテーマにしたい人も少なからずいるだろう。そこで「環境」をキーワードに、総人の3人の先生の研究室を訪問した。生物の多様性という観点から自然科学系の加藤真先生と松井正文先生に、哲学の観点から人間科学系の小川侃先生にお話を伺った。

### フィールドワーカーとしての加藤先生 ― 一枚の葉から何がわかるか ―

加藤先生は現在、花と虫の共進化について研究している。花から蜜を奪うハチなどの虫と奪われる花のように、利害が衝突する二つの種が、互いにその形態を変えること（共進化）によって互いに利益を得る（虫は蜜を得る・花は虫に花粉を運んでもらう）ことができる（共生）ようになる。この共生という関係に競争とは違う可能性が感じられるのだという。

この加藤先生の研究は大学時代のフィールドワークがベースとなっている。北には南アルプス、南には太平洋に囲まれた静岡に生まれ、海では貝の、山では蝶などの昆虫の採集をしていた加藤先生は、当時の京大農学部の昆虫学教室に惹かれ、農学部農林生物科に入る。当時はフィールドワークに取り組む先生や院生が今よりも多く、一般教養や農学部で提供される生物学実習を取るとともに、休日は友人たちと自主的に昆虫や植物の採集をしていた。特に、農学部の学部実習である、通称「バス実習」や「芦生実習」に1回生ながら参

加させてもらい、京都近郊のさまざまな地域に行き植物採集をしていた。これらの実習では、後にスマトラ熱帯林の多様性に取り組むこととなる井上民二先生や、栽培植物についての調査を行っていた阪本寧男先生など、当時研究者として脂の乗っていた先輩たちが指導していた。こうした先輩やライバルの友人たちとの出会いやかかわりが加藤先生に大きな影響を与えたことは想像に難くない。こうして植物採集に精力的に取り組んだ結果、1回生の時には日本の植物のほとんどをマスターしたという。その知識と経験をベースにして、天敵が草食性昆虫の数をどうコントロール



この葉一つ一つがハモグリムシの生きた証

しているかという観点から個体群生態学に取り組み、現在に至る。

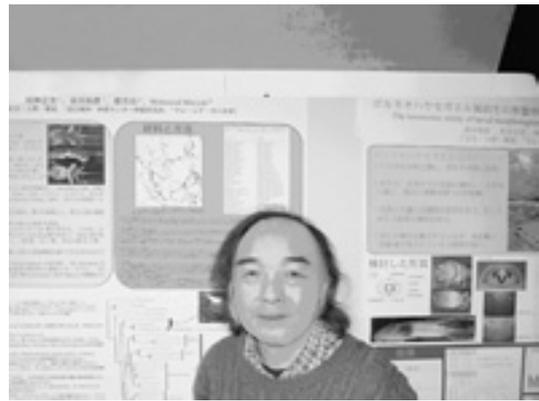
訪問の最後に、研究している生物の一例として、ハモグリムシを見せてもらった。その名のとおり木の葉っぱの中にもぐって、その柵状組織を食べる虫だが、それに寄生する寄生バチもいる。2回の脱皮を経て、実際に成虫になるのは5%未満で、たいていは寄生バチにやられてしまう。そうすると虫が食べた跡がその虫の生きた証 — すなわちいつ、どこで、どのような理由で死んだのかを示す、履歴書となるのだという。ハモグリムシは種ごとに潜行パターンが違い、それに寄生する微小な寄生バチもそれぞれの種ごとに10~30種いるというのだ。これには唖った。「多様性」と一口に言うが、あくまで個々の事例があつてのことで、ここまで複雑だとは…。だからこそ面白いのだろうと思う。それは宝探しにも似ているのかもしれない。

## 気さくなカエル博士

### — 松井先生とゆかいな両生類たち —

松井先生の研究室を訪ねた人は誰しもその両生類の標本の多さに驚くだろう。さまざまなカエルの標本から大きなサンショウウオ、足のないアシナシイモリの標本まで実に豊富な種類の標本が並んでいる（とはいってもわれわれにはそれぞれの違いがあまりよくわからないが）。現在、松井先生は両生類の研究を主にしており、新種の命名（アシナシイモリなど）や、遺伝子や形態学の観点から種を再び分類すること（ホクリク、ハクバ、アカイシ、の各サンショウウオや沖縄に生息するハナサキガエルなど）に加え、吉田南構内にある堀田池に生息するカスミサンショウウオの生態研究なども行っている。

更に、東南アジアのカエルの鳴き声による分類



の研究をしたり、カエルに関する著書も発行したりしている（先生の『日本カエル図鑑』（文一総合出版）は大変好評らしい）。より京大の学生に親しみやすい活動としては、最近まで京都大学総合博物館で開かれていた『日本の動物はいつどこから来たのか』などのイベントでも先生が参加している。

「学費払ってんだし、将来の自分の役に立つかなんて考えすぎないで何でもやってみろよ」と言う松井先生。先生は大学時代に昆虫学を志したが、学部（繊維関係）の事情で化学をやらざるを得なかった。だが今になって振り返ると、そのときの勉強は、カエルの持つ毒などの解明に大変役立っているという。研究室には学生のころからちょくちょく顔を出し、研究の手伝いなども熱心に行っていたようだ。そんな松井先生からは「遊びも勉強も徹底してやれ！院生の人とも仲良くなって、いろいろ教われよ！」とアドバイスをいただいた。



両生類たちの標本

## 事象そのものをみよ

### — 小川先生のフィールドとは —

小川先生の研究室には、大量の本に加えてフッサール、ハイデッガー、ハンナ＝アレントら著名な哲学者の写真が並んでいる。先生の研究分野は主に現象学であり、さらに他のさまざまな分野にも取り組んでいる。現象学とは、フッサールによって創始された哲学の一分野で、人間の世界に対する認識について探求するものである。フッサール研究を中心に行っていた先生だが、最近では、独自の哲学を作るために日々奮闘している。

先生の活動は、著作である『風の現象学と雰囲気』や『環境と身の現象学』（ともに晃洋書房）などの中に見られるように多岐に渡っている。その中で、現在、中心的に取り組んでいるテーマは政治学者マキアヴェッリについてであり、彼を現象学的に見直そうとしている。現象学は政治哲学に行き着く面を持つのだそうだ。先生によれば、現象学のような理論哲学は、政治哲学と切っても切れない関係にある。たとえばプラトンやアリストテレスなどの古代ギリシャ哲学では、認識論・数学論も展開されているが、究極的には人が人とともに暮らしていく中での「倫理」を探求している。そこで先生は、現代のように政治学と哲学を別々のものにするには問題があるとし、そのような分け方にとらわれない見方を求めているのだ。このほかの分野においても「哲学者は専門化を拒む最後の人間」と考えている。

また、哲学者には芸術家的な面もあるという。それは、人がこれまで持たなかったような新たな視点でものごとを見る、というクリエイティブな性質である。先生はセザンヌについても研究しているが、セザンヌの特徴である複数の視点からの描写には、哲学者にとって学ぶところが大きいからだそうだ。哲学は、科学が発展する現代におい

ては一見必要がなくなっていくように思われるが、実際にはまだまだ必要とされている。先生は、その理由を哲学の持つこの創造性に見出している。それゆえ、哲学は単なる文献だけの研究であってはならず、「事象そのものと格闘すべき」と強調する。

実際、先生は地球環境問題における哲学者の役割を模索しているという。自然現象を科学的に分析したり、統計をとったりして調査するのは科学者の仕事だが、それらが全体の中でどのような意味を持つのかという問題に関しては、哲学者の持つ多面的な見方が生きてくる。先生はよく科学者とお話になるそうだが、このような会話は新たな発見の生まれるよい機会になっているという。

また、哲学を学ぼうとする学生に対するアドバイスを尋ねると、哲学を学ぶ上での大前提である語学力の強化、ディスカッションを通しての他者の視点の理解、そして適度に体を鍛えること、という3点をあげ、これらはぜひとも実行してほしいと語った。



古今の哲学者とともに

# 主観をたいせつに

## 阪上班報告

濱田全次郎（1回生）

山下 和也（1回生）

富田 直希（文化環境学系2回生）

阪上 雅昭（自然科学系教授）

僕たちが総人探検隊に参加しようと思ったのは、総人に入ってきたにもかかわらず総人の中のことをよく知らなかったからだ。「なんでもできる」と言われているものの、具体的にはどのようにしていったらいいのか先が見えにくかったのだ。同じように、どこでも好きな研究室を探検したらいいと言われて、かえってなかなか訪問先が決まらなかった。話し合う中に僕ら三人は建築に対して興味があったことがわかったので、西垣安比古先生と藤原学先生を訪問しようということになった。さらに、授業に興味深かった小田伸午先生と田中真介先生の研究室も訪問することになった。探検してみると、一見関係ないように見える各先生の研究に共通点があると感じてきた。それは“主観”を大切にすることのような気がする。

## 小田研究室（認知情報学系）

僕らの探検隊が小田先生に会いに行くと、最初に案内されたのは、人環棟の地下1階。みんな最初の探検ということもあり、緊張した面持ち。こんな所に何があるのかなと思いながら、部屋に入ると、年配者の方々と研究生が数人おり、1人の方が部屋をぐるりと歩いていた。「これは、足の裏にON/OFFのスイッチがあり、歩行のリズムを測定して、老人がこけやすいことの研究をしているんだよ。」と小田先生から説明があり、なるほどと思い、歩いている人をよく見てみると、体中に機械がついていた。おそらくこれで体の局部の動きを観測しているのだろう。その部屋から出た後、僕らは研究室の方に行き、大学院生数名にインタビューをさせていただいた。大学院生の多くは何らかのスポーツをやっている、そのスポーツを研究しているみたいだ。インタビューさせていただいた方には、野球から見た運動制御を研究されている方や、野球の投手が、バッターがいる時といない時とでは、どのように球にばらつきが

あるかを研究されている方、バスケットボールのディフェンスについて研究されている方がいた。どれも研究内容を説明してもらおうと大変おもしろく、質問も多く飛び交った。その中で小田先生の話された、主観と客観についての話が興味深かったのでここで紹介したいと思う。

例えば被験者に「半分の力で遠投してみてください。」と言った時に、実際は遠投距離が半分にならないことが多い。これはやはり主観と客観の違いであり、だから主観を定量化するのは難しいそうだ。また、野球の投手の肘の角度について研



小田研究室の実験を見学する探検隊

究したとしても、肘だけで速い球は投げられない。やはり体全体も見なければいけない。こういった、部分と全体の関係は、主観と客観の関係と近いものがあるとおっしゃっていた。実際に、肘の角度の研究対象にしているプロの投手に「投げる時にどこに注意しているの?」と聞くと、肘の角度ではなく、「腰の入れ具合。」と答えることがあるそうだ。主観と客観の問題以外にもたくさんの興味深い話を聞くことができた。

小田先生は「学生はとにかく、興味のあることをしなさい。興味があることをやらないと、自分が何者かわからなくなるよ。」とおっしゃっていた。この言葉は進路に迷っている僕にとって、とても心に残るものだったし、おそらく小田先生から私のような学生へのアドバイスなのだろうと思う。

(濱田全次郎)

## 藤原研究室 (文化環境学系)

インタビューは人環棟の4階にある会議室で行われた。ほとんど予習もせずいきなり押しかけた僕たちに、藤原先生は時に問いかけながら、またある時には比喩を交えてわかりやすくかみ砕いて説明してくれた。そういったわけで2時間近くにもなった話は、授業とはまた違った非常に内容の濃いものとなった。とても書ききれないので、ここは開き直って不理解や至らない点もあろうが、僕の印象に残った点を書くことで雰囲気だけでも伝えたいと思う。主題となったのは「谷崎潤一郎の小説で建築を考える」という一見突飛(すいません)にも見える研究課題について。またそれに関連して主観と空間のかかわりについてである。

普通、建築といえばカッコイイ建物や意匠、あるいはもしかしたら力学的構造のことを思い浮か

べるかもしれない。これら安全性や格好良さを持った質のよい空間を作るというのも建築の重要な役割である。しかしこれらから一歩進んで、建築とは空間の意味を変える技術であるともいえる。例えば平地に壁で囲いを作ると、そこはもう自由に行き来することは出来ない。さらにその中に一方向に向かってイスと机を並べれば、座る人はそっちを向くしかない。みんなが向いているほうに黒板を置けば「教室」のできあがりだ。藤原先生はこのような「空間の意味」を研究における興味のお中心にしている。これになぜ文学が登場するのかというと、人間にとって意味というのは言葉にまつわるものであるからだ。作品の中では、小説家は表現しようとする意図にふさわしい舞台と言葉を自由に選んで、空間の意味そのものを読者にダイレクトに感じさせることができる。それに加えて小説家は人間の行為とともに常にその舞台になる空間を意識しなければならないので、空間の意味に対しての洞察力は普通の人より優れて



藤原先生のインタビュー風景

おり、普通は意識されない隠れた空間の意味を読み取ることが出来ると思われる。と、いうわけで小説を読み解くことで小説家の認識を踏み台にして空間との人とのかかわり、空間の意味を探ろうというのが藤原先生の研究方針なのである。

そう考えれば藤原先生のやっていることはまさに「建築論のどまんなか」と言うべきものである。

谷崎や建築家である自分がそれぞれの主観からどう物事を捉えているかを意識することでそこから見えるもの、そこからでは絶対に見えないものが分かるのだとも話されていた。僕は一応今まで理系としてやってきたので、研究は主観をできるだけ排除して行われるべきものだと考えてきた。そのため谷崎潤一郎という個性の「主観」から普遍的な空間の意味を引き出すというこの考え方は新鮮に聞こえた。

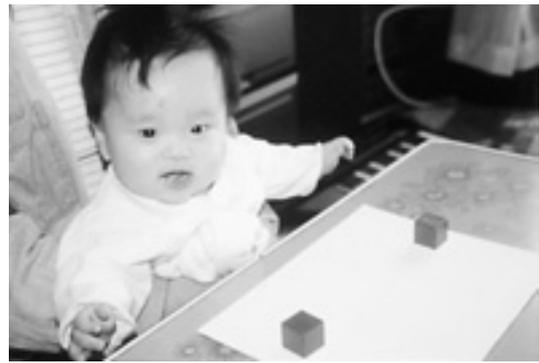
また、藤原先生は人間・環境学研究科の第1期生でもあり、人環・総人についても興味深い話をする事ができた。中でも印象深かったのが、総人を作るときにその理念として掲げられたという「総合人間学」についてだ。これは、既存の学問を統合するのではなく「人間が世界でどう生きるか」という元来一つのものであった学問のありかたに迫るものだそう。そして、総人はそのような学問のための学部だという話である。これを聞いていまさらながら総人にきてよかったと思えると同時に、総人でやっていくということの大変さに身の引き締まる気がした。

(山下和也)

## 田中研究室（認知情報学系）

僕は去年の前期に、田中先生のスポーツ医科学という授業を取っていた。その授業は入学したてのその当時の僕が、心の底から湧き上がるような興味を感じた数少ない授業だったので、この機会に是非！とおもい訪問させてもらった。

その日先生は膳所高校の高校生たちに「霊長類の子どもたちの暮らしと遊び」というテーマで話をする予定だったので、僕らもそれに便乗することにした。教室の場所がよく分からず僕らが遅れて到着すると、みんな黒髪の制服を着た高校生た



こちらを見つめる赤ちゃん

ちが席に着いて話を聴いていて、「若いな…！」と思うと同時に高校の頃の自分を思い出して一瞬新鮮な気持ちが蘇った。

話の内容としては、ボノボと他のチンパンジーの違い — ボノボに特有のこととして、食べ物を積極的に他の個体に配分することがあるだとか、相手の気持ちを感じ取ったり予測することができるということ — や、そういったことが人間の発達において、いつ起こるのかということがあった。

なかでも興味深かったのが人間の「見る力」についてだ。例えば乳児の目の前の右と左に積み木を置いたときに、生後3ヶ月だと片方しか見ることができないが、4ヶ月になると両方を見ることが出来る。さらにその積み木を人の顔に近い絵に換えると見つめる時間が長くなり、それに向かって手を差し出す。また人間の赤ちゃんの場合だと積み木を見たあとに傍にいる大人の顔を見るが、チンパンジーだともものだけしか見なくてなかなか人の顔を見ない。

また別の実験で、積み木があって、目の前に二つの器を差し出して「これに入れてごらん」というと、1歳前半の子どもだと片方にガンガン詰め込むだけだが、1歳半ばになるともう片方に気付いて積み木を入れ分けるということをする。こういった「～ダケデハナイ…～ダ」というタイプの操作を可逆操作といい、この可逆性、切り換える力ということが自我の誕生と連動している。

例えば、幼児のおでこにシールをこっそり貼っておくとする。1歳後半の子だと鏡を見てシールを剥がすことができるのだが、1歳前半だと鏡の中の自分を自分と気付かずにシールを剥がすことができないのだという。

そういった話を聞いた後に、先生の研究室に移動して話を続けた。そこで話したことといえば、先生の研究分野についてはもちろん、屋久島でのゼミの話から、僕の将来の話に至るまで(!)、色々なことをわっはっはと言いながら話した感じだった。

先生の大学院時代の話で「発達ってというのは人間だけ見てもわからないよ。他の種も見る。それから、大人だけ見るんじゃなくて時間を追って見ないとわからない」といったことを言われたという話があった。

話がつい横道に逸れてしまうこともあり、僕が「余談になってしまいました」というと、先生が「多分余談の方が大事なんじゃないか」と言った。言いたいこと、よくわかる気がします。ひとつのことを見るには結構周りの色々なことが必要で、何か一つだけ見ようとすると案外それが見えてこない。

目の端に映るものも大事にして、色々なことが見えるようになりたいな、と思った。

(富田直希)

## 西垣研究室 (文化環境学系)

「大きな意味で、やっぱりその、我々が生きるということ……、生き生きとして生きているということ、そういうことに何か近づいてみたいっていう、ことがあったんだと思うんですね」

本当に、生き生きとして生きるってどういうことなのだろう。「生きる意味」って何なのだろう。

「生きる意味」ってどういうことを言うのか？そんなことばかりが直に気になって仕方がない。それをどこから解したら良いのか、或いはそれが解れるものなのかさえわからない。ある人は、「生きる意味」なんてない、生きることになぜ意味が必要なのかと言う。

「フッサールという人がどういうことを考えていたかと言いますと、我々はたまたまこの地球という人工衛星のようなものに乗っかっているのだからと。それともそうではなくて大地の上に『住んでいる』のだからか。」

我々は宇宙船地球号の上に偶然乗っかっている、そういうことでは我々の生活の極めて重要な部分が希薄化してしまうのではないのか。我々は大地の上に住んでいるんだ、そういう実感を大事にしなごら、住宅だとか都市だとかそういうものをつくっていくという発想ができないだろうか、ということを考えていると先生は仰っていた。

NASAのホームページ(<http://antwrp.gsfc.nasa.gov/apod/astropix.html>)で毎日、宇宙の画像が更新されている。もの凄く遠くにある星だとか他の銀河だとかの写真を見ていると、「我々の生きている意味」なんてものは多分無いな、と思ってしまう。ところが、そのサイトにある衛星からの写真に地球の風景や家々の灯り等が映っているのを見ると、先程の思いに対して本当にそうだろうかという疑問が浮かぶ。宇宙とか、連綿と続く生死の営みといった無限的なものの淵を覗き込むと、「生きる意味」などないと言わざるを得ない。しかしながら、「生きる意味」というのがある主観性を免れ得ないながらも、それが無いと言ってしまったり、それについて考えることを止めてしまったりするのも何か違う気がする。

D号館の一番東側の南側の教室からは大文字山が極めて綺麗に見える、そういったことが話の流れで出てきた。今のキャンパスの中で、大文字が

見えるということがどれ程このキャンパスの中に  
取り込まれているだろうかということ、三高時代  
は今よりも遥かに学生たちがそれを謳歌していた  
はずで、京大生が共有できる極めて貴重な財産に  
なっていたはずだということ、そして今それが消  
えているんじゃないのかということ…。

このD号館41教室から見える大文字山の景観  
についての話が出たとき、先生方二人は直ちにピ  
ンと来たが、学生たちにはその景色が頭に浮かば  
なかった。

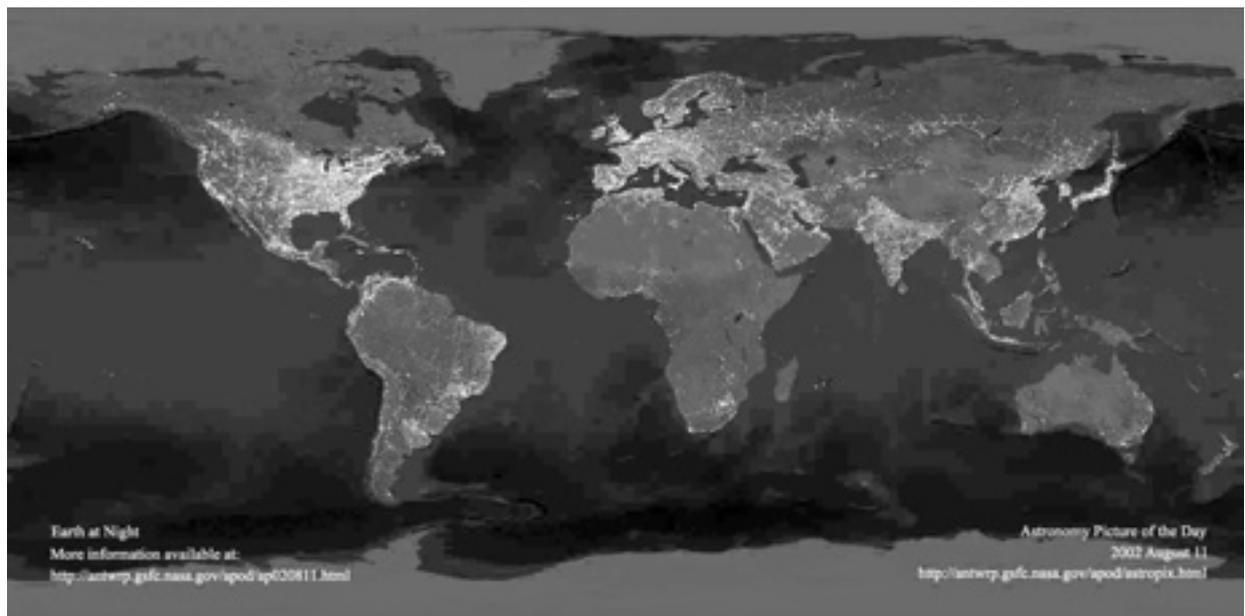
西垣先生の研究室にインタビューに行くという  
話になったとき、実を言うと僕はあまり気乗りし  
なかった。週に一度自主ゼミで会っているので、  
新鮮ではないと思ったからだ。しかし実際に訪ね  
て話を聴いてみると、新鮮だった。京大吉田キャ  
ンパスや京都大学そのもののあり方に対する先生  
方の熱い想いも聞けて良かった。

「様々なことをやってみられる場所でしょ？大  
学っていうのは。ところがその様々なことをやっ  
てみられる場所が様々なことをやらなかったらそ  
れは、世の中が沈滞しますよね。痛い目に遭うか  
もしれないけど、こんなことやってみました！と

いうのと言えるようなことをやっぱりやっていか  
ないといかんのだろうと思うんですね。大学では  
…。」

(富田直希)

それぞれの先生のお話はここには書ききれない  
ほどの内容の濃いものでした。十分伝えきれない  
ですが、興味をもたれる方がいれば幸いです。  
最後になりましたがお忙しい中私たちのインタ  
ビューに答えて下さった先生、そして研究室の先  
輩方、どうもありがとうございました。



人工衛星から撮影した地球の夜 (NASA 提供)

## 山梨正明教授（認知言語学）をインタビュー

### 櫻川班報告

片山裕美子（1回生）

中川 敦夫（1回生）

吉安 亮介（認知情報学系2回生）

櫻川 貴司（認知情報学系助教授）

このグループでは山梨正明先生（認知情報学系）の研究室を取材させていただいた。先生のご専門の話、学生時代の話などに加えて、総合人間学とは何かということでも話はずんだ。

**探検隊** まず、先生のご専門を教えてくださいませんか？

**山梨** 専門は言語学です。

**探検隊** 研究としては、どのようなアプローチをとっていますか？

**山梨** 言語学を認知科学の一分野として位置づけて言語現象を分析し、言葉のメカニズムとその基盤となっている人間の知のメカニズムを解明していくアプローチをとっています。狭い言語学の枠組みを越えて、認知科学の関連分野（例えば、脳科学、認知心理学、情報科学、人工知能、などの関連分野）の知見も取り込みながら言語現象を分析し、言語のメカニズムとその背後に存在する知のメカニズムの解明を試みています。

**探検隊** 具体的にはどのような言語学の理論ですか？

**山梨** 特に国際的に注目され、理論言語学の主流となっている認知言語学のパラダイムを学問的な背景にして研究を進めています。

**探検隊** 研究室のメンバーは？

**山梨** 山梨研のメンバーは、博士前期課程と後期課程の院生を中心に20数名が、音韻・形態論、統語論、意味論、コミュニケーション論などのサブテーマに関する研究を行っています。

**探検隊** 学生時代の言語学の研究についてお聞き



したいんですが。

**山梨** 言語学の研究を始めたのは学部時代の後半、とくにカリフォルニア大学に留学してから本格的に言語学の研究を始めています。その後、修士課程と博士課程は、ミシガン大学で言語学の研究を続けています。僕の学生の頃、特にアメリカに留学した1970年から70年代の半ばの時代は、統語論を中心とする形式言語学、数理言語学の研究が盛んになっていて、当時、この種の言語学にも一応興味は持っていました。この方面の論文や本を読むと、言語の分析に数式や論理式をベースにした表示法が使われていたので、留学前から、代数学や集合論、論理学の関係の本も読みました。ただし、ほとんど独学で読んだだけです。残念ながら、日本の大学の言語学関係の教育には、制度的にこの種の数理関係のメニューは用意されていま

せん。また、言語の人間的な側面や言葉の主観的な側面にも興味を持っていたので、学部頃から文学作品も（一部、趣味的に）読みました。今になってみると、結局、学部時代から言語学の分野と一見関係ないように見える理系、文系の関連分野の勉強を自分なりにできたのが良かったと思います。

**探検隊** アメリカの大学の専攻の仕方などは、制度的にみてどうですか？

**山梨** 留学して感心したのですが、アメリカの大学は、基本的にどの分野を専攻するにせよ、専門分野だけでなく関連分野のメニューの教育が充実しています。例えば、言語学を専攻するにしても、先ほど触れた理系、文系のメニューだけでなく、脳科学、バイオロジー、コンピュータサイエンス、人工知能などの基礎的な教育が充実しています。私が留学したカリフォルニア大学の学部、ミシガン大学の大学院でも、この種の関連分野の勉強ができましたが、それが現在の言語学の研究、とくに人間の知のメカニズムを背景として言語のメカニズムを探求していく認知言語学の研究に非常に役立っています。

また、アメリカは、大学によっては、専門分野を複数とることができるダブルメジャーの制度があります。文系、理系を問わず同時に複数の分野を専攻できるシステムです。留学中に、認知言語学の推進者で世界的に有名なジョージ・レイコフという学者に学びましたが、彼は、学部時代は数学と英文学の二つの分野を専攻していたと聞いています。大学院へ進み彼が最終的に専攻したのは言語学ですが、学部時代の数学と英文学の専攻が、理系・文系の双方のセンスを必要とする言語学の学問的な背景になっていることは間違いありません。総合人間学部にも、京大の他学部や他大学にはあまりない主専攻・副専攻というユニークな制度がありますが、日本では総人のこの制度が、ア



メリカの複数専攻制に近い教育・研究のシステムとして注目されていると思います。

**探検隊** 総合人間学とは何でしょうか？

**山梨** 難しい質問ですね。総合人間学部は、単純にこれが専門分野だというように決められる学部ではなくて、既存のいろんな学問分野の知識を統合しながら、総合的に知を探求して行く学部ではないかと思います。ですから、この学部を最初からトップダウン的には定義することはできないと思います。総合人間学は、自分がどんな分野に身を置いても、そこから自然に関連分野にも興味浸透し、そこに新しい知の出会いがあり認識の仕方が広がっていく。偶然の出会いも意外性も含めて、そこに新しい知の発見がある。だから、理系・文系と、一応は制度的には分かれていても、どちらから出発するにせよ知の世界が浸透しあい、新しい学問の方向を発見していける場が総合人間学で、「これが総合人間学だ」という定義は最初から不可能だと思います。

例えば、総合人間学の視点から言語学の研究を考えた場合、言葉そのものを研究するのが言語学だと思うのは、狭すぎると思います。言葉は心の現われでもあるし、脳の機能の現われでもある。そういうように考えることが大事で、最初から言語学はここまでの研究領域だと限定することには問題がある。言語現象をみていくと、心も脳の機能も関係し、言葉を話す主体としての人間、人間

のおかれた言語環境のエコロジー、動物行動学、進化論、等の関連分野の問題が自然に関係してくる。ですから、言葉の研究も、当然ながら総合的な視点から研究する必要があるわけです。

総合人間学部の学問的なスタンスというのは、例えば、理学部だったら自然現象を研究のターゲットにするとか、文学部だったら文書、テキスト、等を研究のターゲットにするというような、伝統的な学部のスタンスのようにはいかない。

**探検隊** 総人の学生は、専門分野に関する焦点というのがなかなか見つけられない人が多いと思うのですが…何かアドバイスはありませんか？

**山梨** 総合人間学の学問も、専門を決めていく場合、制度的には文系であれ理系であれ、言語系、社会学系、数理系、生物系、物理系というように、どこかに焦点を置きながら研究し、学んでいかなければならない。気をつけなければならないのは、「総合人間学」は、学問の一つの場としての学部の一般的な名前であって、「総合人間学」という専門分野はないわけですから、一応、制度的にはどこかの具体的な知の領域に焦点をおいて研究し、学んでいかなければならない。

学部に入った1、2年の段階では、一般教養の科目、専門の基礎科目を中心に広く学び、学問の裾野を拡げていく。しかし、そのままいくと、博識型、教養型の学生にはなっていくが、専門の研究者としては「アブ・ハチとらず」の学生になって研究のターゲットの焦点がボケてしまう。だから、例えば2回生、3回生の頃までに、恣意的な選択にみえてもいいから、仮に専門を決めてみる。逆説的に聞こえるかも知れないけれども、一度、専門領域を決めてその分野をじっくり覗いてみると、どの関連分野の知識をさらに学ぶべきかが見えてくる。つまり、一度、途中の段階で特定の学問領域に焦点を当てると、何がその分野の関連メニューとして必要かが自然に見えてくる。また、

逆に、関連分野のメニューをじっくり見ることで、最初に仮に決めた専門が自分にとって実際に適しているか適していないかが理解でき、専門分野の選択をずらしたり、変えていくことができる。この戦略は、非常に大事だと思います。

**探検隊** 僕たち1、2回生は、研究室にあまりなじみがないのですが…山梨先生の研究室はどういったところなのでしょう？

**山梨** 一応、私がこの研究室の指導教官ですから、愛をこめて(!?)学生たちの教育・研究に従事しています。ただ、有り難いことに山梨研のいいところは、院生、研究生が多いものですから、僕が手取り足取り教えなくても、先輩の学生たちが後輩たちを自然に指導する伝統ができています。僕が教えてくれと頼んでいるわけではないですが、院生たちが研究ゼミ、読書ゼミなどを自然にやっています。この研究室には、トップダウン的な研究のオリエンテーションはなく、学生も教官も自由に研究をエンジョイしています。

**探検隊** 最後に、先生の趣味を教えてくださいませんか？

**山梨** 趣味ですか？ 趣味は、まず人を笑わせ、人に笑われる(!?)ことです。つまり、場を盛り上げて明るくすることかな。モノマネ、それから鼻歌を歌うことも。モノマネを、馬鹿にはいけません。「学び」の本質は、まね、まねびですから、モノマネは、学問の原点だと思います。それから、自分をこよなく愛し、家族を愛することも趣味(!?)。それから、山梨研の学生たち、総合人間学部の学生たちを愛すること(!)。京都大学を、あらゆる社会、世界の人々を愛すること(!)(笑)

**探検隊** 山梨先生、山梨研の皆さん今日はお忙しい中どうもありがとうございました。

**山梨** また、暇な時はいつでも来て下さい。

## 〈取材を終えて〉

今回は総合人間学について考える貴重な時間が持てました。総人では、専門科目を2つ取ることが出来るという特徴があります。でも、実際には、私はダブルメジャーどころか一つの学びたい分野も決められずに浮いた状態で、漠然とした不安を感じています。今回は、大学に通う目的を考え不安を解消させるという意味で、また、未知の分野に触れて自分の興味を探るという意味でとても良い経験になりました。(片山裕美子)

初の探検隊活動ということで緊張していました。しかしいざ研究室に入ると、山梨先生やその学生さんたちが非常に暖かく迎えてくださったので、リラックスして取材に挑めたと思います。

最も印象的だった話はアメリカの大学におけるダブルメジャーのお話。総人もそんなふうに着実に学んでいける学部としてアピールできればいいのですが、実際のところ総人の学生は「自分は何をやらいいかわからない」という悩みを抱えている学生が多く、「ダブルメジャー」という感じにおさまっているのが現実だということも感じました。山梨先生の研究内容だけでなく、これからの学生生活全般に活かせる話がきけたことが何より嬉しかったです。(中川敦夫)

僕は理系で総人に入ったのですが、1回生の頃から今(2回生の後期)まで興味が向くままに文系・理系問わず広く色々な分野をかじってきました。山梨先生がおっしゃった「一度専門領域を決めてその分野をしっかり覗いてみる」ということが必要な時期に来ているのだと感じました。一度領域を広くとると、「一つの分野に絞ることは視野が狭くなるのではないか」という不安がつきま

といます。ですが、先生の言葉を後押しにして足を踏み出してみようと思います。

また、日ごろ院生の方とお話する機会がないので、今回院生の方々の実体験に基づいたアドバイスを聞いたのも貴重な経験です。(吉安亮介)

(取材は、2006年1月26日に、総合人間学部棟一階で行なわれている山梨研究室の定期セミナーにお伺いする形でさせて頂きました。山梨先生並びにセミナーご参加者の方々、お時間を頂きましてありがとうございました。)

## 〈参考にした本・Web ページ〉

・山梨正明先生を含め8名による座談会の記録「総合人間学的「認識と情報」を求めて」有福孝岳編『〈クリレー講義録〉総合人間学を求めて1：認識と情報』1999年、京都大学学術出版会、235-267頁。



総合人間学部の教員による座談会の記録で、総合人間学について語られています。人環・総人図書館などにあります。

・山梨研究室 Web サイト

<http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp>

(紙面の都合上、今回は紹介できなかった山梨研究室のスタッフの研究、卒論や院生の修士論文、博士論文などの情報も載っています。)

・山梨先生の教員紹介ページ

[http://www.h.kyoto-u.ac.jp/staff/151\\_yamanashi\\_m\\_0\\_j.html](http://www.h.kyoto-u.ac.jp/staff/151_yamanashi_m_0_j.html)

# 物理学系の研究室を訪ねて

## 山田班報告

左近 高志（1回生）

地蔵 繁範（1回生）

鎌田 論紀（自然科学系2回生）

小室 育美（文化環境学系3回生）

山田 孝子（文化環境学系教授）

私たちは物理学を専門とする4人の先生方（際本泰士・阪上雅昭・富田博之・前川覚、各先生（50音順））にインタビューを行い、研究内容と学生（主に自然科学系）へのメッセージを伺ってきた。以下に、各先生へのインタビュー内容と私たちの感想を紹介する。左近高志、地蔵繁範、鎌田論紀、小室育美の4人それぞれが、研究室の記事を一つ担当し、全体を鎌田論紀がまとめたものである。

## 際本泰士先生（自然科学系）

際本先生は、色々な自然科学の概念として用いられ工学的応用の基礎にもなっている「渦」を研究している。初めから「渦」を研究しようと思っていたわけではなく、この「渦」という概念をもとに全体を統一的に理解したら面白いだろうと思ってはじめてということである。

研究室には、大小様々な実験器具が所狭しと並んでおり、その中には手作りのものや、最先端の研究には似つかわしくないとと思われるような日用品を利用したものもあったのが印象的だった。どこにでもあるクーラーボックスの内側にアルミホイルを貼り付け、その中にカメラを入れて作った測定器具が特に意外に興味深かった。最先端の（自然）科学と言うと、いかにも未来的な器具ばかりを使っているものだとばかり思っていたが、こういうものを見ると、文系の私でも科学に対して妙な親近感を覚えた。先生のホームページにはムービーつきの詳しい研究紹介があるので、興味のある方はウェブ・サイトを訪れてみてください。

先生から学生に対して次のようなメッセージをいただいた。

総人とは何なのか、それは僕たちよりも、実際に総人で教育を受けた院生や4回生なんかの意見をほんとは聞いた方がよい。彼らの意見が一番大事だと思う。ただ、僕が考えるのは、総人という言葉に捕らわれちゃいけない、ということです。総人という組織にアイデンティティを求めちゃいけない。組織としてのアイデンティティは大抵壊れる。そうではなくて、ここ（総人）にいることを、自分にとって最大限に活かすためにはどうすればいいかを考えるべきと思う。

学部生の段階では、後に転向するときのことまで考えて、いろんなことに対応できるように、多少専門性が薄くなっても広く基礎を勉強した方がいい。そして、大学院まで含めて専門的な勉強をする。そういう勉強をするのに総人は向いていると思う。

学生には出会いを大切にしたいと思って

いる。友人との出会いも、先生との出会いも。いい先生について、その人の考え方を吸収して欲しい。あの人ならこう考えるだろうな、という風に。その人が優れていると思うなら、先生でなく先輩などでも構わない。

それから、学部生・院生のうちに、がんばる癖をつけて欲しい。安易に楽な方向に流れては、結局何も残らない。何にしても、それで結果的に幸せになれるかは別にして、自分で決断して忍耐強く進んで行った方が、後悔が少ないと思う。



際本研究室にて 際本先生を囲んで左近(右)と小室(左)

際本先生ホームページ

<http://www.plasma.jinkan.kyoto-u.ac.jp/>

## 阪上雅昭先生（自然科学系）

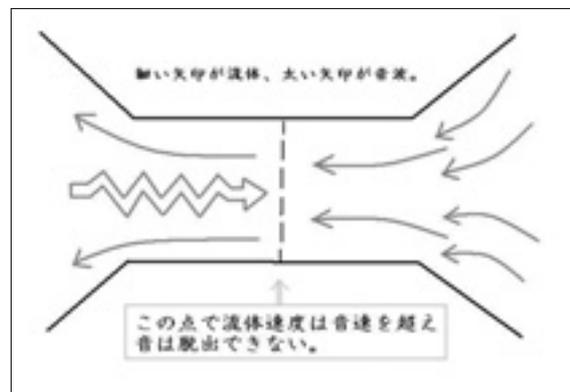
阪上先生の研究室では、様々な研究の中から学生の私たちにとって直感的に理解しやすいものということで、ブラックホールの研究を紹介していただいた。

ブラックホールは私たちの銀河の中心など色々なところにあると言われているが、理論的には性質が予言されていても観測で実証されていない。そこで先生が考えたのが音のブラックホールであ

るという。一体どんなものなのだろうか？ 通常ブラックホールは光が出てこれないものとして知られているが、音のブラックホールは光の代わりに音が出てこないようにしたものだ。

先生の研究室では、音のブラックホールを使ってブラックホールとホーキング輻射（ブラックホールが光を放出している現象で、ホーキングにより予測された）の観測をしようとしている。観測では、音波（実際のブラックホールでは光や重力波に相当）が出ているかどうかを確かめるそうだ。音のブラックホールの実験を行って、理論的な予測とどのくらい合っているかを確かめておくと、ブラックホールの重力波の場合の予測に役立つという。実験は工学部の方をお願いして、研究室の大学院生がそのための理論を担当されている。

音のブラックホールでは、ブラックホールの性質を世界で初めて実際に確かめることができるという点が最大の魅力だとおっしゃっていた。とてもスケールの大きな研究だ。先生は昔は理論にしか興味がなかったそうだが、最近では「やっぱり物理は実験してなんぼや」と思っているとのことである。ただ、「実験は迫力はあるけれどあまり色々なことはできないので、理論とのバランスをとってやっていこうと思っている」そうである。



音のブラックホールの模式図。装置内に流体の流れを作り、その流れの速さが、ある点で音速を超えるようにする。この状態で下流から上流に向かって音を発しても、流体が音速よりも速い速度で流れているため音は脱出することができず、一種のブラックホール状態ができる。

先生から学生に対して次のようなメッセージをいただいた。

物理の研究では基礎を身につけることが大切です。そして重要なのはそこから新しいものを作っていくことです。総人の学生には双方のバランスを大切にしてほしい。そのためにも、教科書の内容を要領良く吸収するだけでなく、それを作ってきた人の考え方や苦しみを考えて勉強してほしい。常に問題意識を持って $+\alpha$ を考える習慣づけは絶対に必要です。

阪上先生ホームページ

<http://vishnu.phys.h.kyoto-u.ac.jp>



音のブラックホールを説明してくださる阪上先生

### 富田博之先生（自然科学系）

富田先生の専門は非平衡系の統計力学で、非平衡状態から平衡状態への移行過程と、非平衡状態で起こるさまざまな現象に興味を持って研究されている。非平衡状態から平衡状態への移行は、きれいに並んでいたトランプが、シャッフルすることにより52!通りの同格の並び方が次々に現れるだけであるにもかかわらず、赤と黒の色だけに注目すれば必ず一様に混ざっていくようなものだ、という説明が分かりやすく理解できたような気に

なってしまった。

しかしながらこれは、ごく単純な系の話で、少し構成が複雑な系や平衡から遠く離れた状態から出発するときには、途中で様々な構造が現れることがある。非平衡状態である現在の宇宙に我々のような意味ありげな構造ができるのはどういう原理によるのかということを知りたい、と先生はおっしゃっていた。物理学の一分野の研究でありながら、このような大きなテーマを見据えているということに、学問の深さを垣間見た気がする。また、研究していて理論的に予測したことが実験やシミュレーションの結果と一致したときは、やはり気持ちがいいそうである。

先生から学生（主に自然科学系）に次のようなメッセージをいただいた。

学生には自然科学の中でもできるだけ広い知識を身につけてほしいですね。最初から物理だけ、化学だけでは行き詰ってしまいます。また、自然科学系だけ捉えたら「ミニ理学部」でいいと思いますが、社会科学や人文科学のやり方も身につけてほしいですね。総人ではそのようなことがやりやすい場を提供しています。

総人自然科学系の目的は物理学者や化学者を育てることじゃなくて、総合的な科学の知識を持った人材を育てることです。本当に物理をやりたい人には別に理学部の授業を履修しなさいと指導しています。大学院進学に必要な最小限の科目は全学共通科目と専門科目で揃えているつもりですけどね。

将来何が必要になるか分からないから、いろんなことを勉強しておいてほしいと思います。そして、1つでいいから何か自分がのめりこめる学問を見つけてほしいですね。

富田先生のホームページは情報満載である。先

生曰く、かなり学生を挑発しているそうなので、一度覗いてみてはいかがでしょう？

富田先生ホームページ

<http://ace.phys.h.kyoto-u.ac.jp/~tomita/>

### 前川覚先生（自然科学系）

前川先生の研究室では、おもに核磁気共鳴（NMR）法を用いて物質の磁氣的性質の研究をなさっている。最新の実験装置を実際に見せていただいたが、強い磁場を発生する超伝導磁石や絶対零度近くまで冷やせる冷凍機など、驚嘆の一言であった。研究内容等については、先生ご自身のホームページに非常にわかりやすい解説があるので、下記アドレスを参照してください。

前川先生は低温磁性物理学を研究しておられるが、総人自然科学系と理学部との違いは「研究」よりも「教育」の中にあるということであった。広い視野を養って広い分野・世界を「読める」人材になり、他分野の研究のアプローチの仕方も身につけて、自らの世界に新しい風をもたらすこと、前川先生はそう学生に期待し、次のようなメッセージを熱く我々に語ってくださった。

京大生には、単なる「テクニシャン」…つまり、「単に上手に扱える」というだけの人間ではなくて、新しいものをどんどん創造・開拓できる人間になってほしいと思っています。中でも総人の学生というのは、文系のわかる理系、理系のわかる文系という、非常に広い価値判断のできる人間であってほしい。そのためには広い“視野”が必要です。我々は今、総人で授業をしていますが、その際我々は、単に教えたことを理解できるだけでなく、それを一步超えて

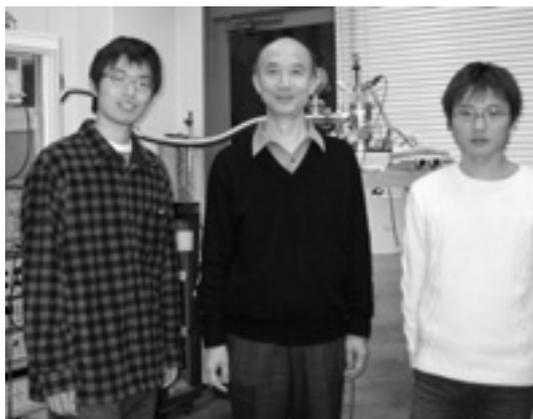
新しいことを自分でどんどん創造していく、そういう力を養ってほしいという観点で授業をしています。

最近では技術的な事故がよく起きていますよね。脱線事故、トンネルの壁面落下…。そんな時、世の中はすぐに責任者出てこいといって、誰が悪い、彼が悪いと人の首を飛ばすことばかりを考えているんですね。そんなことよりも、なぜ事故が起きたかという科学的原因を突き止めて、二度とそれらが起こらないようにすることが一番大事なのではないでしょうか。マスコミを見ていると、論理的に物事を探求していく見方が全然できていないという思いがします。トンネルの中を新幹線があれだけの速度で通り抜ける。そりゃ壁が落ちるのは当たり前ですよ。絶えず強い衝撃があるし、重力で常にモノというのは上から下に落ちようとしているのですから…。それを落ちないように作る、落ちればどこに科学的に不十分な点があったのか、それを解明していくべきなのです。そんな考え方ができていないのは非常に悲しいことです。

総人の学生のみなさんには、たくさんの分野のことを学んで、いろんな方面からのアプローチの仕方を身につけてほしいですね。そして論理的に正しく何が起きているかを読める人、新しい「風」をもたらしてくれる人になることを、期待しています。

前川先生ホームページ

<http://nmr.jinkan.kyoto-u.ac.jp/maegawa/>



前川研究室にて 前川先生を囲んで左近(右)と鎌田(左)

## インタビュー後の感想

どの先生方も気さくにインタビューに応じてくださり、とても楽しそうに自身の研究内容について説明してくださった。一線の研究者たるには、やはり自分が本当に好きな分野でなければならぬのだろうと感じさせられた。「総人はやりたいたことが決まっていない奴ばかり」というようなことが、総人の中でも外でも良く聞かれる。だが、先生たちのような「ホンモノ」に接し、その刺激を受けてから自分の進む道を選べるのは、学生としては大きな利点なのではないかと思った。

また、さまざまな視点からのアプローチをという話を聞いたが、そのためにはさまざまな物事にやはり興味なり、好奇心なりを普段から抱いている必要があるのだと実感した。新しい視点とは、「あれをやってみようかな、これをやってみようかな」という思いの中から得られるものであると改めて思った。総人探検隊でのインタビューの経験は、もっともっと、幅広い分野のことを勉強してみよう、そう感じさせてくれる体験でもあった。

インタビューを通じて、先生たちがいろいろなものに興味をもっていることが本当に良く分かった。そして、創造的な作業の背景には幅広くしっかりとした基礎知識があるのを感じた。どの先生

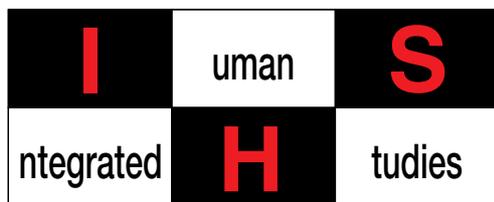
も、研究を進めていく上で、基礎の習得と新しいものの創造が重要であり、学生には広く基礎を学んでほしいとおっしゃっていた。

実験器具の大きさや所狭しと並ぶ機械に圧倒されたばかりではなく、なかでも印象的だったのは、最先端の研究ゆえに実験器具も手作りであったり、試行錯誤の工夫がこらされていた点である。実験器具にも先生のユニークな発想が散りばめられているようだった。

今回の研究室訪問を通して、私たちの知的好奇心は大いに刺激された。基礎勉強の日々に疲れて目的を見失ってしまったときは、研究室訪問をしてはどうだろうか。第一線で活躍する先生方との触れ合いを通して、あなたもきっと何かを得られるだろうと思います。



打合せをする鎌田(左)と地蔵(右)



#### 編集後記

◆今回の特集は、「総人探検隊」として学生たちが関心をもった先生方にインタビューを行い、研究の内容、学生へのメッセージなどをまとめてもらうという、これまでにはない企画を組んだものでした。どの記

事も探検隊メンバーの募集から始まり、学生たちの班分け、班ごとのインタビューの実施、原稿の作成という一連の作業をとおして出来上がっています。当初、どのような記事が出来上がるのか多少の不安を抱えながらの出発ではありましたが、この取り組みに積極的に参加した学生たちの遂行力に目を見張らされ、全く危惧にすぎないことがわかりました。広報委員としては、出来上がった原稿を編集するという従来の作業以上の負担が掛かってはしまいましたが、今回、日頃接することの少ない1~2回生の総人の学生とも向かい合うことができたことや、彼らのすばらしさに慰められたのでした。サクラの時期とともにめぐってくる新入生の姿も今年は一段と楽しみに感じるのではと、思いを新たにするほどでした。

◆「特集」のインタビューを承諾してくださり、長時間を割いてくださった先生方には、お忙しいなかご協力いただき、厚くお礼申し上げます。

◆本学部・研究科広報に関してご意見がございましたら、当委員会までお寄せ下さい。今後の編集活動の参考にさせていただきます。(T・Y)

人間・環境学研究科  
総合人間学部

広報委員会